



TITLE:

# エンゲルスの未公刊書簡

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

---

CITATION:

平井, 俊彦. エンゲルスの未公刊書簡. 経済論叢 1976, 117(4): 298-304

ISSUE DATE:

1976-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/133640>

RIGHT:

# 經濟論叢

第117卷 第4号

---

減価償却會計の導入と定着……………	高 寺 貞 男	1
19世紀末プロイセン農業經營の勞働力構造と 農業人口の階層構成……………	加 藤 房 雄	19
アイルランド農業とイギリス資本主義……………	本 多 三 郎	44
Standard Oil Trust 形成期における 石油精製部門の構造……………	谷 口 明 丈	72
エンゲルスの未公開書簡……………	平 井 俊 彦	98

---

昭和51年4月

京都大學經濟學會

## エンゲルスの未公刊書簡

平 井 俊 彦

41. Regent's Park Road N. W.

6. Decbr. 1894.

Geehrter Genosse

Ich bitte Sie dem Verein meinen besten Dank zu übermitteln für den freundlichen Glückwunsch zu meinem Geburtstag. Ich hoffe der Verein, der ja jetzt auch schon sein halbes Jahrhundert seit 4 Jahren überstanden hat, werde es auch auf die mir zu Theil gewordenen 74 Jahre bringen & dann noch Kraft u Jugendlichkeit genug übrig haben, um das Jahrhundert ebenfalls voll zu machen.

Aufrichtigen Gruss von

Ihrem

F. Engels

北西区, リージェンツ・パーク・ロード, 41番地

1894年12月6日

尊敬する同志

私の誕生日に心からの御祝詞をいただいたことにたいし、厚く感謝している旨、協会に御伝言くださるようお願い申し上げます。今日まで、協会はすでに半世紀と4年にもわたってもちこたえてきましたが、なお、私の生きてきた74年間も続くことを、さらに、力と若さを充分にあまして、1世紀をも全うされんことを、お祈りいたします。

敬 具

F. エンゲルス

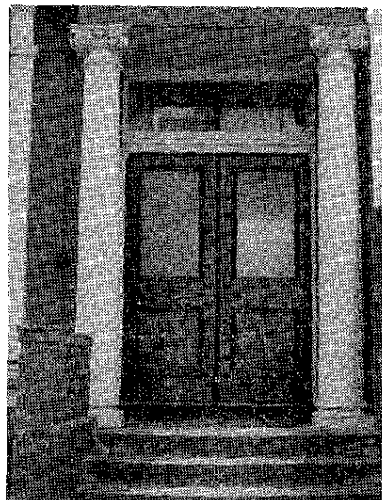
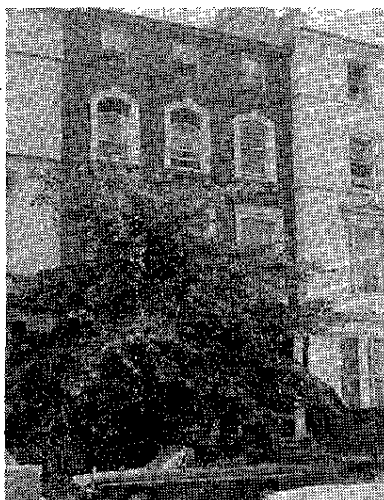


## エンゲルス書簡について

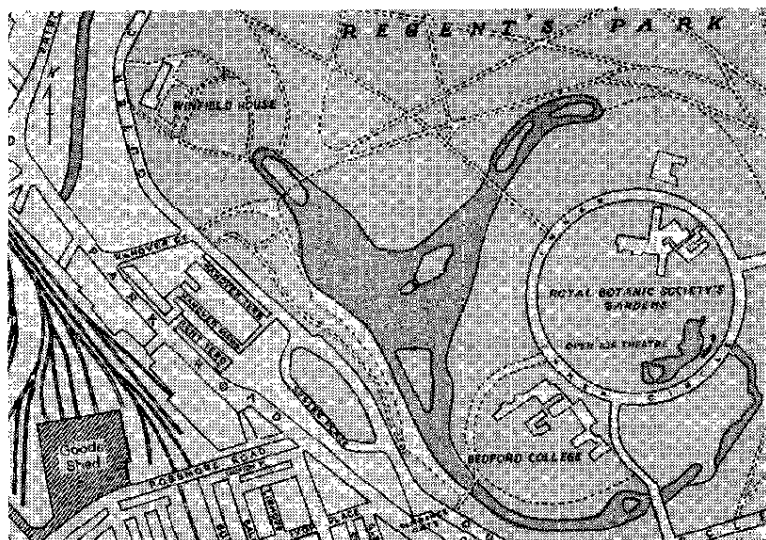
京都大学経済学部図書室に、マルクスとエンゲルスの書簡の原文が、それぞれ1通づつ所蔵されている。いずれも、福井孝治先生が1923年にドイツ留学されたとき、ベルリン、アウグスブルク街のフーゴー・シュトラizenント古書店で求められ、帰国後、河上肇先生と相談されて、本学に寄贈されたものである。この事情は、1968年11月の『経済論叢』（102巻5号「マルクス生誕150年記念号」）のなかで、福井孝治先生が「思い出すままに」書かれた文章からうかがうことができる。また、この点について、河上先生は次のようにもらしておられる。「私はいつかF君からドイツ土産としてマルクスとエンゲルスの手紙を貰ったときに、こんなものは私が貰ふよりも大学に寄附して下さいと言つて、京都大学へF君の名で寄附して貰ったが、今では自分が貰つておけば可かつたと思つている。藤村氏等の手紙も立派な屏風になつたところを見ると、やはり自分で屏風にすれば可かつたと思つている」（『中央公論』第43年9号、昭和3年9月号に所収の「古今洞随筆」）。そうだとすれば、福井先生の帰国（大正14年）が3年後の、河上先生の辞任後であれば、この手紙は今ごろ屏風になっていたかもしれない。

マルクスの書簡（1882年8月24日付、グレート・ヤーマウスのエンゲルス宛）は、すでに先の『経済論叢』で田中真晴氏の解説をつけて発表されている。また、この書簡は Marx/Engels Gesamtausgabe, 3 Abt., Bd. 4, 1931 に掲載されている。いま公表する「エンゲルス書簡」は、未公開のものである。

この書簡は、エンゲルスが74歳の誕生日（1894年11月28日）に、協会から祝詞をもらったことに対する、御礼の手紙である。エンゲルスは約8ヶ月後の翌95年8月5日に喉頭癌のためにイーストボーンで不帰の客となるから、この誕生日がエンゲルス最後のそれとなった。1870年9月20日に、エンゲルスはロンドンに移り、北西区、リージェンツ・パーク・ロード、122番地に住んだが、1894年10月から近くの、この41番地に移った。というのも、1890年から秘書と家政



エンゲルスの家（1970年6月10日，田中真晴教授の撮影）



Stanford's Map of Central London, 1951. より抜粋

婦を兼ねていたルイーゼ・カウツキー Louise Kautsky が、この年、医師ルートヴィヒ・フライベルガー Ludwig Freyberger と結婚してこの新しい家に移るのにもなって、エンゲルスもここに転宅してきた。この時から、フライベルガーは主治医としてエンゲルスの面倒をみることになった。(ちなみに、フライベルガー夫妻は、エンゲルスの遺言執行人であった)。そして、病氣療養のため、エンゲルスお気に入りの保養地イーストボーンに移るまで、ここにいたから、この41番地の住居がエンゲルスの最後の住居となったわけである。

ところで、この書簡について二つの問題がある。一つは、この文面に出てくる「協会」der Verein とは何であり、エンゲルスはこれとどうかかわっていたかという点であり、二つには、書簡の宛名である協会の同志とは一体だれであるかということである。すでに封筒が散逸してしまっているから、後者については推定するほかない。

この「協会」は、エンゲルスが「ジョン・ハンター・ウォッツ宛の手紙」(1894年4月3日付)のなかで、「古い共産主義協会」(der alte kommunistische Verein)と呼んでいるものである。エンゲルスはその他のいくつかの書簡のなかでも、ことに英文の手紙のなかでも、この協会をよぶとき、かならず der Verein とドイツ語で書いており、また、その創立が1840年2月7日であるから、書簡本文の創立後54年という年数と一致するからである。その正式の名称は、ロンドンにあった「ドイツ人労働者教育協会」der deutsche Arbeiterbildungsverein である。この協会の歴史については、すでにエンゲルス自身の論文「共産主義者同盟の歴史によせて」(Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten, London, 8. Okt. 1885, Werke, Bd. 21) が詳しく説明している。いま、簡単にエンゲルスの説明によって、「協会」とエンゲルスとのかかわりをみてみよう。

1834年にパリでドイツ人亡命者がつくった民主主義的=共和主義的な秘密の「追放者」同盟から、その最も急進的な、おもにプロレタリア的な分子が、1836年にわかれて、新しい秘密の正義者同盟(Bund der Gerechten)を作った。

この同盟が、「協会」の前身である。ここで活躍したのは、植字工カール・シャッパー Karl Schapper, 靴工ハインリヒ・バウア Heinrich Bauer, 時計工ヨーゼフ・モル Joseph Moll などであって、パリを追放されて、ロンドンに来て、1840年に「ドイツ人労働者教育協会」を作った。この協会は、同盟にとって新同盟員を募集する役割を果たした。エンゲルスがこの協会のメンバーに接したのは、1843年のことである。この時の印象を、エンゲルスは次のようにもらしている。

「私は1843年に、ロンドンで彼ら3人の全部と知り合いになったが、彼らは、私が見た最初の革命的プロレタリアであった。そして、そのころ細かい点ではおたがいの考えはかなりかけはなれていたとはいえ、……この3人の真の人間からうけた堂々たる印象を、けっして忘れることはないだろう」と。このとき、シャッパーはエンゲルスに加盟をすすめたが、かれはそれを断った。おそらく、同盟が古い陰謀団的な伝統や形態をぬけ出せずにいたことが、エンゲルスの「批判的共産主義」の立場になじまなかったためであろう。もっとも、ロンドンの同盟員たちとはたえず通信していたのだが。同盟の活動の重心がパリからロンドンに移ってから、同盟の性格も、ドイツ人だけの同盟から次第に国際的な同盟にかわり、労働者協会にも、多くの国の人々が参加するようになった。1847年にこの協会は、ドイツ人の名をけずり、「共産主義労働者教育協会」(der kommunistische Arbeiterbildungsverein)と改めた。同盟や協会がインターナショナルな形で労働者階級の中に深く根を下ろしたことをみて、マルクスとエンゲルスは同盟に加わった。「それまでこの同盟においてわれわれが異議をもっていた点は、いまや同盟自身の代表者たちによって、間違っていたとして捨てられた。われわれ自身が改組に協力を求められたのである。……そこで、われわれは同盟にはいった。マルクスはブリュッセルでわれわれの近い友人たちで同盟の一つの班を作り、他方、私はパリの三つの班に顔を出した。1847年の夏に、同盟の第1回大会がロンドンで開かれ、そこへはヴォルフがブリュッセルの班を、私がパリの諸班を代表して出席した。」



1847年と1849-50年に、マルクスとエンゲルスが『共産党宣言』をはじめ、さまざまな形で同盟や協会のなかで精力的な活動をしたことは、あまりにも有名である。その後、1850年9月に協会が冒険主義的な戦術に傾いていたセクト主義（ヴィリヒニシャッパー）におちいったために、マルクスとエンゲルスは一時、協会から離れたが、1850年代の終りから再び積極的に参加した。1864年9月28日に国際労働者協会の設立が準備されるや、共産主義労働者教育協会は組織をあげて、これに参加した。総評議会には、協会のメンバーが多数ふくまれていた。マルクスとエンゲルスはもとより、フリードリヒ・レスナー Friedrich Leßner, ヨハン・ゲオルク・エカリウス Johann Georg Eccarius, ゲオルク・ロホナー Georg Lochner, カール・プフェンダー Carl Pfänder らがいた。この協会は、さまざまな変遷をとげながら、1918年にイギリス政府によって解体されるまで78年間、続いた。（*M/E Werke*, Bd. 39, S. 552, 『マルクス＝エンゲルス全集』39巻、大月書店、469ページ、参照）。

「協会」はこうして、エンゲルスの願いであった彼自身の年齢74年から4年間は生きのびたが、残念ながら1世紀は全うできなかったわけである。ところで、一時的な中断はあっても、生涯のほとんどを共に歩んできた協会に、エンゲルスは晩年にいたるまで愛着をもっていた。協会に招かれて音楽会に出席したり（93年1月24日付、アウグスト・ペーベル宛の手紙）、あるいは依頼をうけて講演に出かけた。他の団体からの依頼は、すべて断ったのに、この協会だけは別格であった。「この理由から、私はフェビアン協会、独立労働党その他の団体から同様の求め〔講演依頼—引用者〕は、すべていつもお断わりしてきました。ただ今年、例外をなしたのは古い共産主義協会だけですが、そこでは私が50年来のメンバーとされていたものですから」（94年4月3日付、ウオッツ宛の手紙）。こうした歴史的背景をふまえて、この手紙を読めば、一見なんのへんてつもない手紙のようにみえるこの書簡の中に、エンゲルスの歩んだ生涯と願望がこめられているように感じとられるだろう。

最後に、この協会のメンバーであり、エンゲルスの同志たる宛名は、一体だ

れであろうか。だれとでもその人の母国語で相手をする、語学にきわめて堪能なエンゲルスは、また、相手の母国語でよく手紙を書いた。おそらく、Genosseとあるのは、ロンドンにいた協会のドイツ人メンバーではなかったか。そうだとすれば、古くからの友人フリードリヒ・レスナー Friedrich Leßner (1825—1910) と、推定される。というのも、エドワード・エーヴリングは「家庭でのフリードリヒ・エンゲルス」のなかで、次のように書いているからである。「まだロンドンで生活しているドイツ人で名前をあげるべき人では、インターナショナル会員中のヴェテランであるフリードリヒ・レスナー。この人は信頼できる、清廉の人で、リープクネヒトと、親切で控え目で同時に精力的なロホナーを除けば、旧共産主義者同盟の唯一の存命者である」（ペーベル・メーリング他、栗原佑訳『エンゲルスの追憶』大月書店、169ページ参照）。ちなみに、レスナーはといえば、エドアルト・ベルンシュタインらとともに、遺言にしたがって、エンゲルスの骨壺をピーチ・ヘッドの沖に沈めた人物でもあった（ベルンシュタイン「われわれは彼に最後の敬礼をする」、前掲書、217ページ）。

追記：貴重な写真を貸していただいた、田中真晴教授に厚く御礼申し上げる。